

作成中

資料編 「社会的養護経験者向けインタビュー」概要

大阪市社会的養育推進計画を推進していく際の施策決定に当たっては、当事者であるこども（社会的養護経験者を含む。）からの意見を聴取し、意見を踏まえたくえで施策判断し、実施をしていくことが大切である。

そこで、当事者であるこどもの意見について、「どうしてそう思う？」などの定性的な掘り下げまで可能なインタビュー形式にて、意見聴取を以下のとおり実施することとし、今般策定した計画を見直していく際には、意見聴取の結果を最大限反映することとする。

○社会的養護経験者向けインタビュー

i 大阪児童福祉事業協会アフターケア事業部を通じたインタビュー

（大阪府と合同実施）

対象：平成31年3月31日までに退所（自立）した施設、里親等出身者

（内訳）児童養護経験者5名、里親経験者1名、ファミリーホーム経験者1名
（男性5名、女性2名）

期間：令和元年11月2日（土）及び11月16日（土）

場所：大阪市立社会福祉センター会議室

内容：平成28年7～8月にかけて大阪府下3府市で実施した「児童養護施設退所児童等の実態調査」の項目、回答結果を基に、1対1形式でインタビューを実施。

インタビュー結果

○里親家庭を増やそうという動きについて

- ・20代前半男性 里親から3年前に自立（入所期間3年）

施設より里親の方が良い。生活のリズムができるし、家庭環境で育つことが大事と思う。里親宅には色々な方が来るので、外部の人との交流が生まれる。「家庭」の様子を頭で理解しているのと、実際に体験しているのとは違うと思う。

- 30代後半女性 施設から19年前に自立（入所期間12年）

里親よりも施設、むしろ大きな施設がいいと思う。
社会は縦のつながりだが、こどもは横のつながりが大事。もし小規模で周囲のこどもと合わなければ、逃げ場がなくなる。里親も合わなかったときのリスクがあるので、私は里親は選ばないと思う。
施設に入所している間も、週末里親に出る子がいたが、たいがい甘やかされて帰ってきて、そのあと職員が困っていた。

- 20代後半男性 施設から8年前に自立（入所期間18年）

週末里親に行っている子もいたが、人間関係ができてないと、信頼関係が築けなかったときにつらいのではないか。
施設にいたときは一般家庭にあこがれを持ったが、今振り返ってみると、施設では行事やサポートが手厚かったので、自分には施設でよかったと思う。

- 20代前半男性 施設から2年前に自立（入所期間10年）

集団生活では協調性が養われ、同じ釜の飯ではないが、折り合いの付け方などを学べた。
ただ、小さい子には里親の方がいいとも感じるので、低学年は里親、高学年は施設など、どちらがいいとか決めたりひとくりにせず、その子にあったところを考えるべきだと思う。

- 20代前半男性 ファミリーホームから2年前に自立（入所期間3年）

施設の子は暮らしづらそう、大人数、ルールの多さ、バイトや携帯とかも制限がある。
もう一度選ぶとしても、里親を選びたい。

- 20代後半男性 施設から8年前に自立（入所期間5年）

「自分の事は自分で」の感覚は里親の方があると思う。施設は自立したときにギャップが激しい。
ただ、里親の場合、どのような人が里親になるかというところで不安はある。管理する数が増えることも不安。
宗派や思想の関係で、里親と施設とでは、施設の方が一定の安心さはあるのでは。

- 20代前半女性 施設から2年前に自立（入所期間5年）

身近に里親をしたいという話を知っているので、里親さんがもっと増えたらいいのと思う。
施設に行ったこと自体に後悔はない。

ii 里親・ファミリーホームを通じたインタビュー

対象：平成31年3月31日までに退所（自立）した里親・ファミリーホーム出身者
（内訳）里親経験者4名、ファミリーホーム経験者5名
（男性3名、女性6名）

期間：令和元年11月5日（火）～11月15日（金）

場所：各出身里親宅・ファミリーホーム

内容：iに同じ

iii 母子生活支援施設を通じたインタビュー

対象：平成31年3月31日までに退所（自立）した母子生活支援施設出身のこども
（内訳）10名（男性4名、女性6名）（各施設2～3名）

日時：令和元年11月下旬

場所：母子生活支援施設4施設

内容：別紙「母子生活支援施設出身者へのインタビュー」項目について、1対1形式でインタビューを実施。

生活アンケート 調査結果

1. 調査の目的

意見箱を設置していない里親・ファミリーホームに入所している児童が、困ったときに困ったことをどのように表明しているのか、現状に対しどう感じているかを把握するため、里親・ファミリーホームにおいて生活している中学校を卒業された方に対し、下記のとおり生活アンケートを実施

2. 調査対象

令和元年 11 月 1 日現在、里親・ファミリーホームにおいて生活している中学校を卒業された方 かつ、大阪市（南部）こども相談センターが担当している方
（内訳）里親 28名、ファミリーホーム 27名 計 55名に送付

回収数	回収率
35名	63.6%

3. 調査期間

令和元年 10月 24 日（木）～11月 15日（金）

4. 質問内容

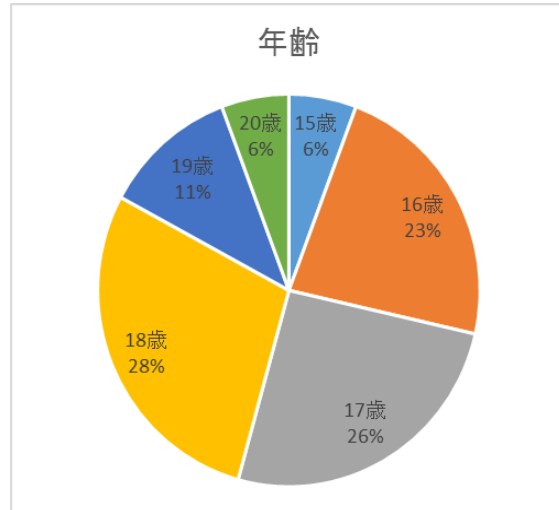
別紙「生活アンケート」項目のとおり

5. 調査結果

I あなたについて

① あなたの年齢をお答えください。

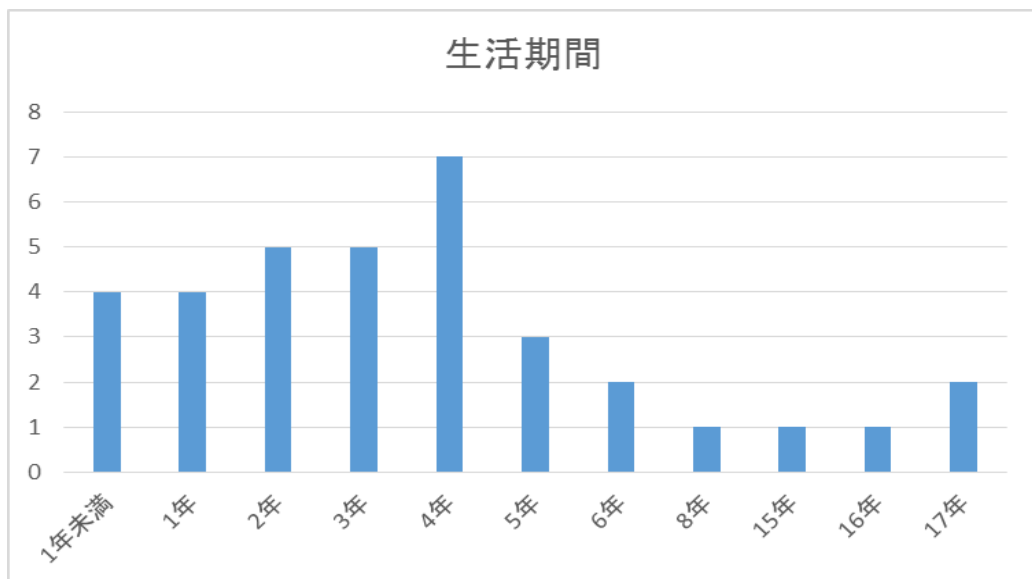
「18歳」が最も多く、
10名（28.6%）であった。
次いで「17歳」25.7%、
「16歳」22.9%であった。
平均年齢は、17.3歳で
あった。



① 年齢(歳)	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳	20歳	計
人数	2	8	9	10	4	2	35
割合	5.7%	22.9%	25.7%	28.6%	11.4%	5.7%	100.0%

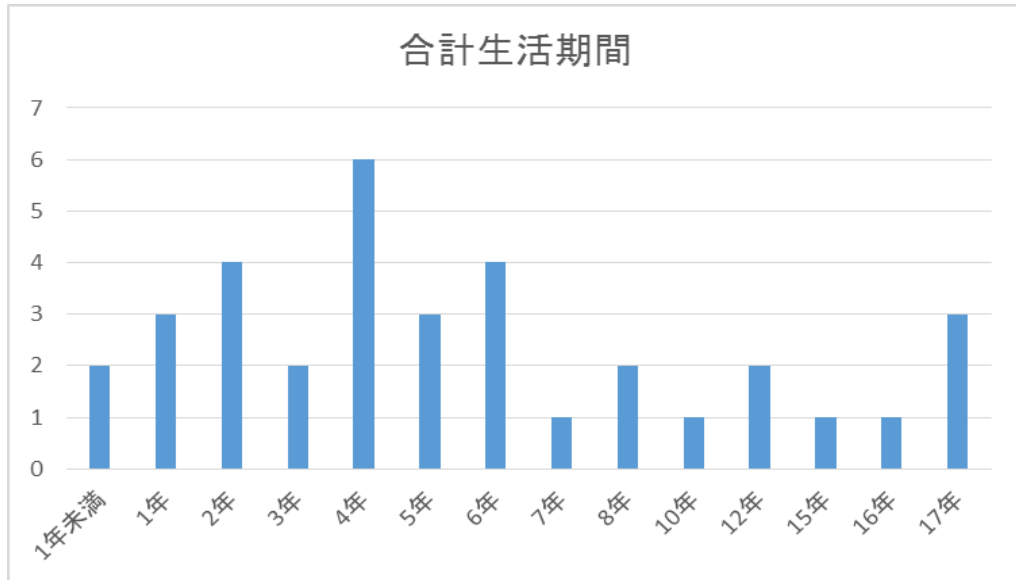
② 里親・ファミリーホームでの生活期間

・現在生活している里親・ファミリーホームでの生活期間
4年が7人と最も多く、平均は4.5年であった。



• ほかの施設との合計生活期間

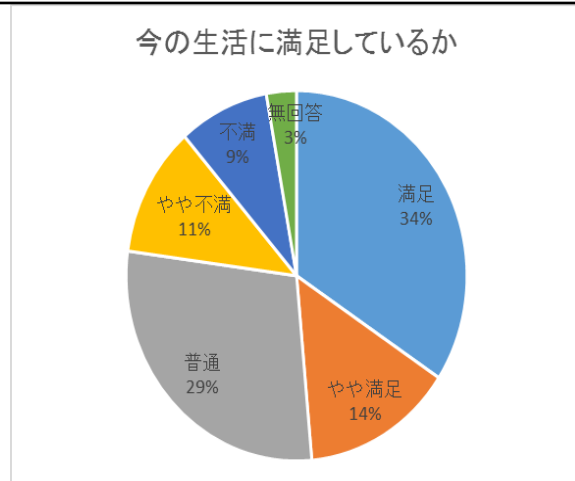
4年が6人と最も多く、平均は6.3年であった。



II 現在の生活について

③ 今の生活に満足していますか。

「満足」と「やや満足」を合わせると、ほぼ5割の回答者となり、「普通」が3割、「やや不満」「不満」が2割ほどであった。

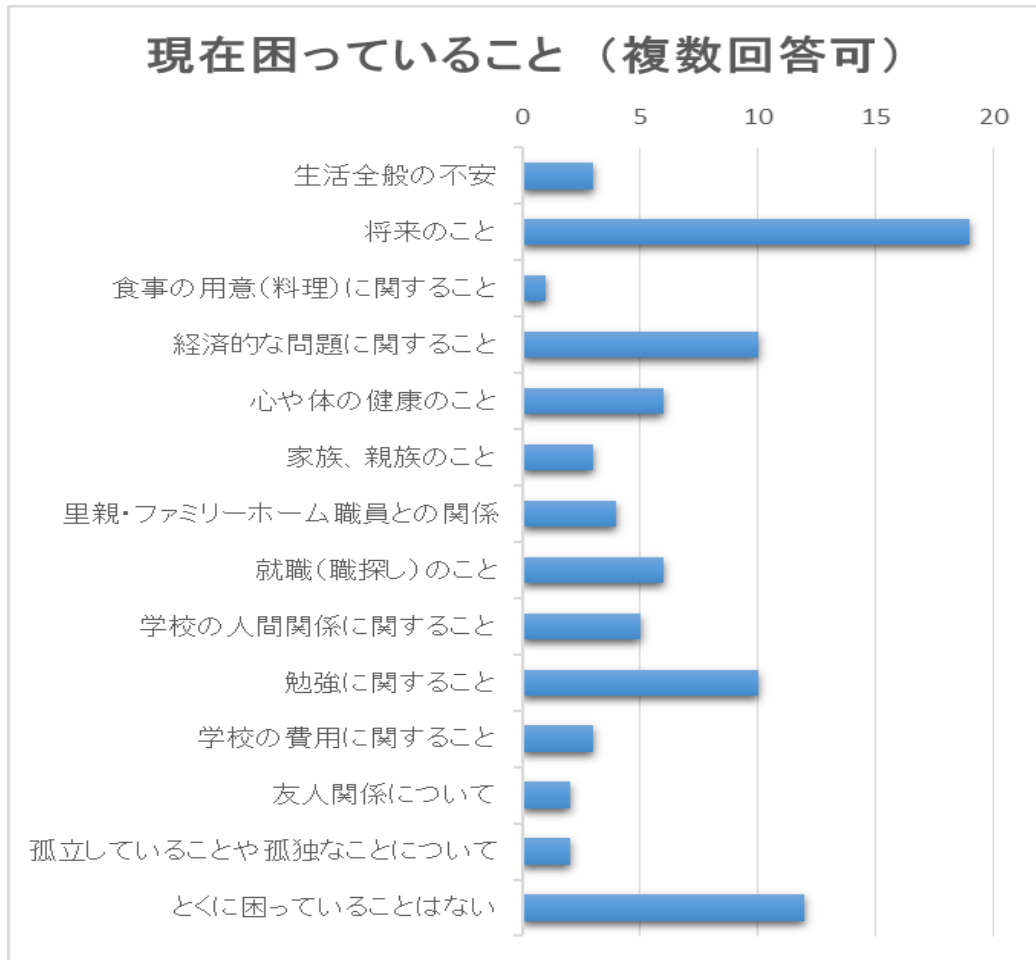


③ 満足度	満足	やや満足	普通	やや不満	不満	無回答	計
人数	12	5	10	4	3	1	35
割合	34.3%	14.3%	28.6%	11.4%	8.6%	2.9%	100.0%

④ 現在困っていることについてお答えください。

最も多かったのは「将来のこと」19名(22.1%)で、次いで「経済的な問題に関すること」と、「勉強に関すること」がともに10名(11.6%)であった。

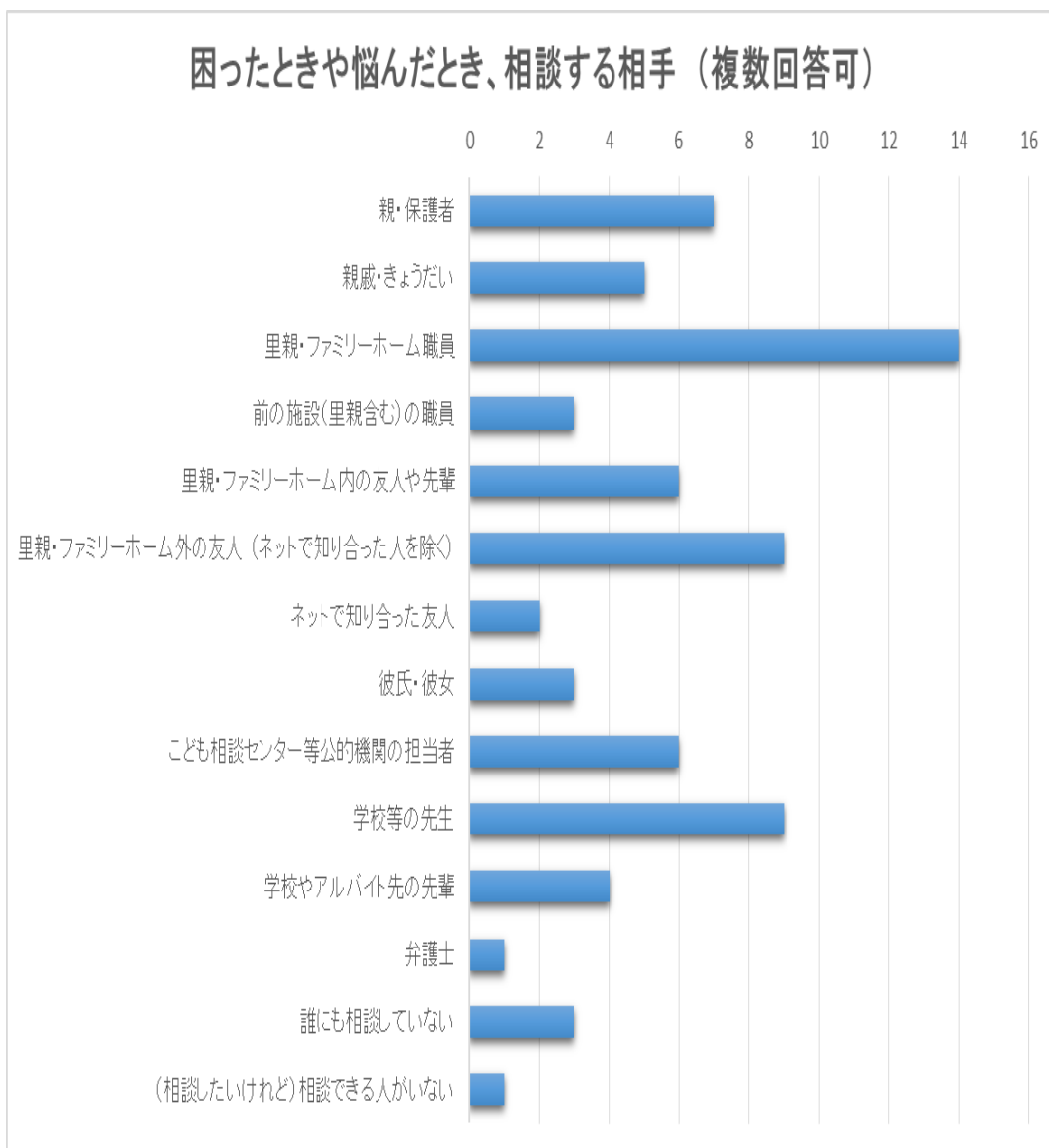
「特に困ったことはない」との回答は12名(14.0%)であり、ほとんどの人が何らかの困難を感じながら生活していることが示唆された。



⑤ 困ったときや悩んだとき、相談する相手は誰ですか。

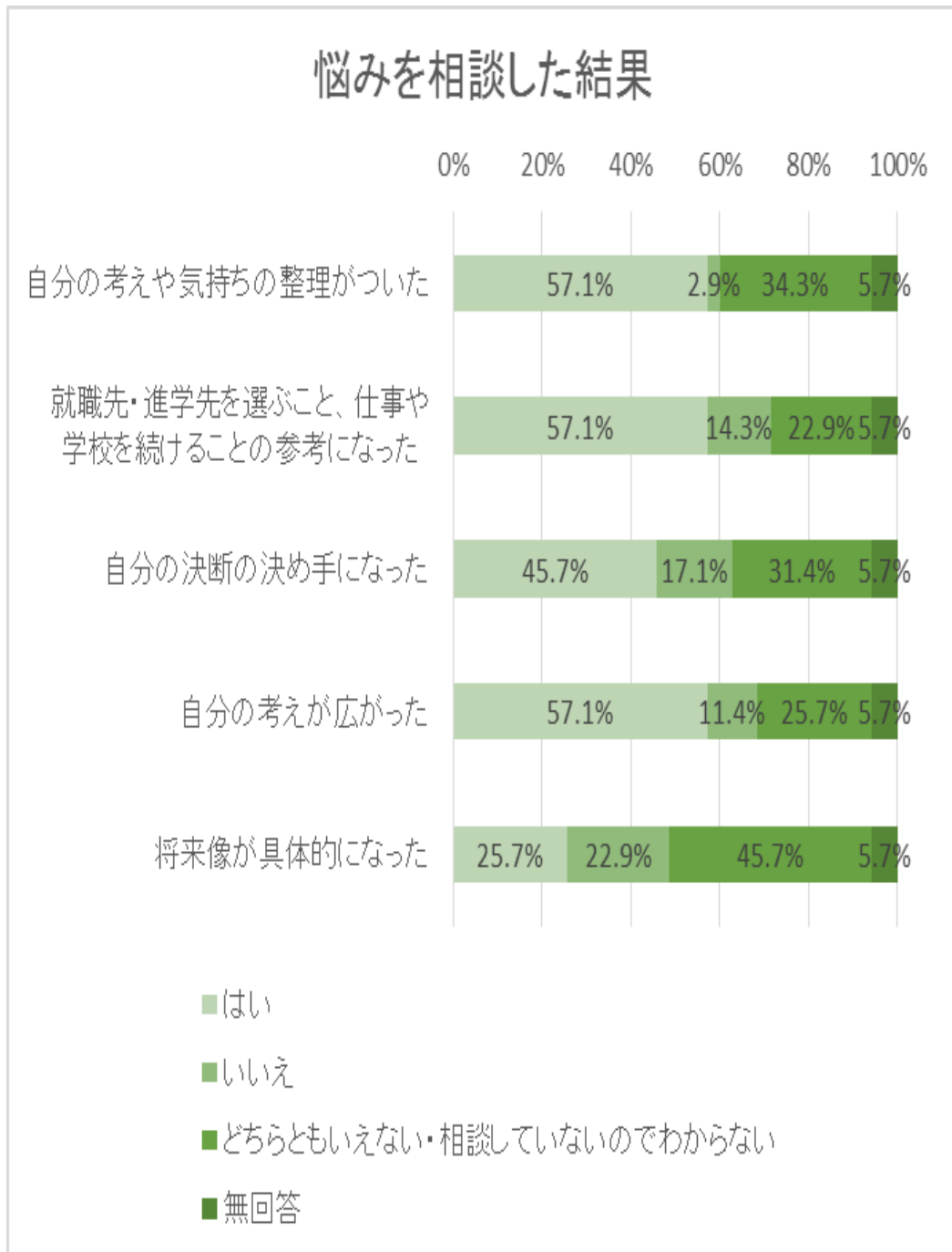
「親・保護者」と「親戚・きょうだい」を合わせると12名(16.4%)に対し、「里親・ファミリーホーム職員」と「前の施設(里親含む)の職員」を合わせると17名(23.3%)、また、「里親・ファミリーホーム内の友人や先輩」は6名(8.2%)であった。

「里親・ファミリーホーム外の友人」「ネットで知り合った友人」「彼氏・彼女」「学校やアルバイト先の先輩」など、居宅外の友人・知人や恋人へ相談している方はあわせて18名(24.7%)であった。



⑥ 悩みを相談した結果についてお答えください。

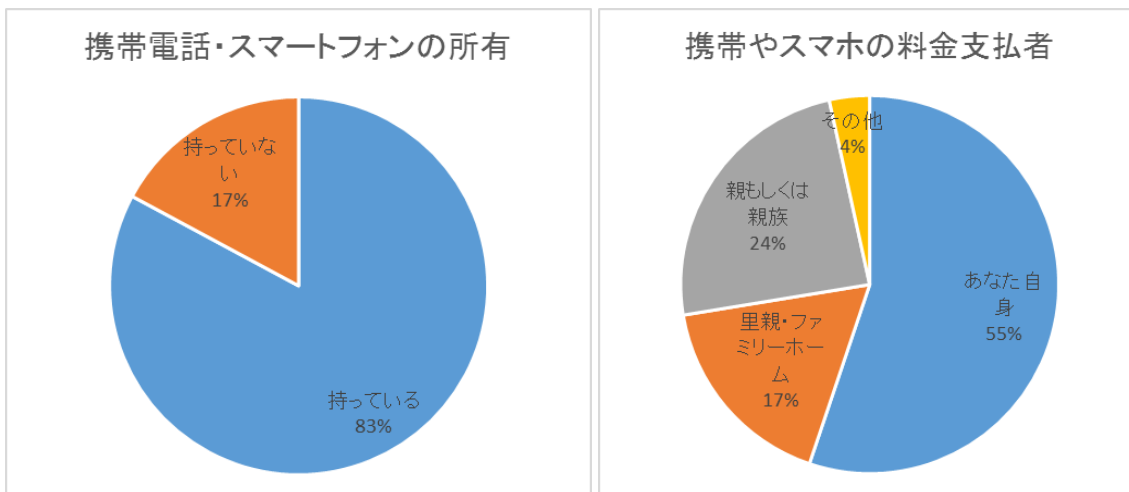
悩みを相談した結果については、肯定的な回答が多かったが、一方で「将来像が具体的になった」については、「どちらともいえない・相談していないのでわからない」が最も多い結果となり、将来への漠然とした不安を抱えながら生活している回答者が多いことがうかがえた。



⑦ 携帯電話・スマートフォンを持っていますか。

携帯電話・スマートフォンを持っていると回答したものは29名と8割を超え、そのうち16名(55.2%)が、自分自身で料金を支払っていた。

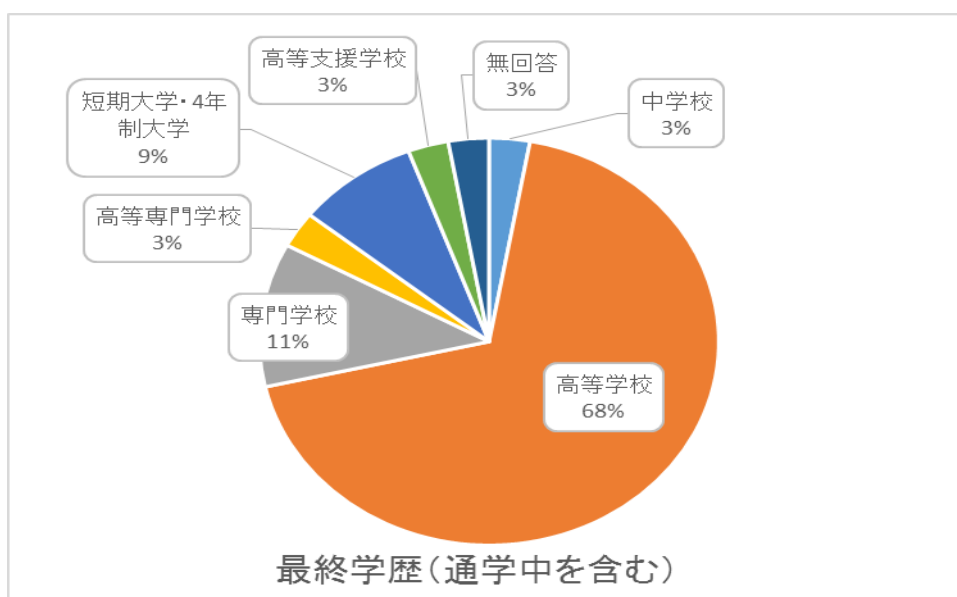
その他は自分自身と親との折半というものであった。



Ⅲ 学校について

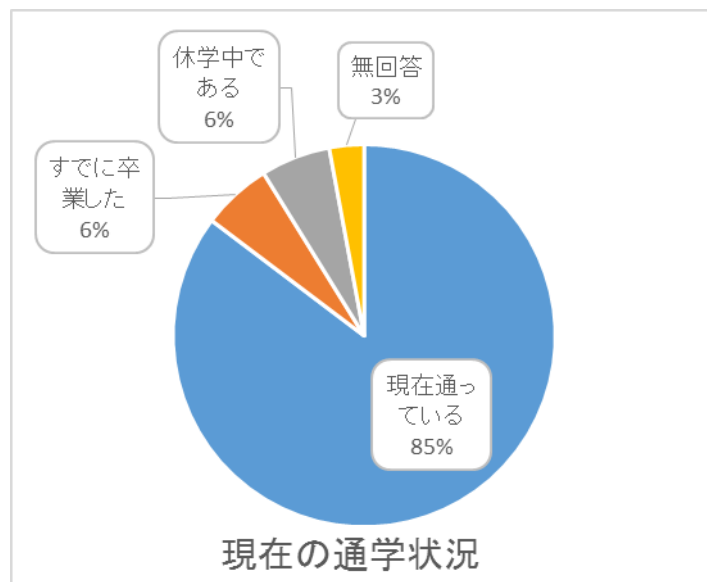
⑧ -1 あなたが最後に通っていたもしくは現在通っている(休学中を含む)学校はどれですか。

回答者数35名のうち、最も多かったのは「高等学校」24名68.6%であった。



⑧-2 ⑧-1の学校に現在通っていますか。

8-1 で回答した 34 名の学校への通学状況としては、「現在通っている」が 29 名 85.3%であった。



⑨ 学校を続けるうえで大変だと感じることをお答えください。

最も多かったのは「学習内容が難しい」12名 21.4%であった。次いで「学校の友人との人間関係」19.6%、「アルバイト等との両立」と「心身のストレス・病気」がともに 16.1%であった。

